

# 倉敷市埋蔵文化財調査年報 1

— 1991年度 —

1992年10月

倉敷市教育委員会

# 序

豊かな自然と瀬戸内のおだやかな風土に育まれた倉敷市には、各所に人々の営みの跡が知られ、数多くの埋蔵文化財が地中に眠っております。現在、わたしたちはそうした倉敷市の歴史を生かしながら、21世紀へ向けて豊かな文化と人間味あふれる文化都市をめざし施策を行っています。

さて、平成3年度は都市計画道路建設に伴う船倉貝塚の発見とその調査、茂浦古墳群の調査など、大きな調査が相次ぎ貴重な成果があがった年でもあります。しかし、ひるがえって考えますと、こうした発掘調査を行うということは、私たちのかけがえのない財産である文化財を掘り出し、もとの状態にもどせなくしてしまうことでもあります。したがって、発掘を行う者はそれを公共の役に立てる責を負わねばなりません。

そこで、このたび、年間の埋蔵文化財保護事業とその成果を広くみなさまに紹介するため、文化財調査年報を刊行するはこびとなりました。これは、出土品の整理などに時間がかかるために、刊行が遅れがちになっております報告書に先駆け、できるだけ多くの方々にすみやかに発掘調査の成果を公開することを意図したものです。

この年報が、今後の文化財保護と郷土の理解に少しでも役に立つことを祈念してやみません。

最後になりましたが、調査にあたり御理解、御協力をいただきました関係のみなさまに対しまして深く御礼申し上げます。

平成4年10月

倉敷市教育委員会

教育長 今田昌男

## 例　　言

1. 本書は、倉敷市教育委員会が1991年度に行った埋蔵文化財保護行政の概要についてまとめたものである。
2. 発掘調査は、倉敷市教育委員会文化課職員福本明、鍵谷守秀、小野雅明、藤原好二が担当した。
3. 本書の執筆は各調査担当者が行い、その作成には文化課職員片岡弘至、中野倫太郎の協力を得た。全体編集は鍵谷が行った。
4. 出土遺物の整理は文化課粒浦分室で行い、本書作成後は同所に保管している。
5. 遺物の整理にあたっては、浦邊美紀子、久保和美、都築喜美、内田智美的協力を得た。
6. 本書の高度は海拔高度であり、遺構実測図の方位は磁北である。
7. 第1図で使用した地形図は、倉敷市発行の50,000分の1の都市計画図を縮小したものであり、その他のものは倉敷市発行のものを複製又は縮小したものである。
8. 本書に関する実測図・写真・遺物等は、全て粒浦分室で保管している。

# 目 次

## 序 文

## 例 言

1991年度事業の報告	1
-------------	---

### 調査一覧表

第1図 調査地位置図	写真1 船倉貝塚1号・2号人骨
------------	-----------------

## 立会調査報告

上東遺跡立会調査報告（上東8号線）	5
-------------------	---

### 第2図 調査地位置図

### 第3図 造構配置図

### 第4図 出土遺物

上東遺跡立会調査報告（上東50号線）	7
--------------------	---

### 第5図 調査地位置図

### 写真2 調査地北半

### 第6図 造構配置図

### 写真3 土層断面

### 第7図 出土遺物

### 写真4 土壌1

## 確認調査報告

藤戸高陽台団地文化財調査報告	9
----------------	---

### 第8図 調査地位置図

王子ヶ岳浜遺跡確認調査報告	10
---------------	----

### 第9図 トレンチ配置図

### 写真5 遺跡遠景

### 第10図 出土遺物

福林湖遺跡確認調査報告	12
-------------	----

### 第11図 トレンチ配置図

日畠遺跡確認調査報告	13
------------	----

### 第12図 トレンチ配置図

### 第13図 出土遺物

上東遺跡確認調査報告	14
第14図 トレンチ配置図	
酒津一水江遺跡確認調査報告	15
第15図 トレンチ配置図	
天王山荒神古墳確認調査報告	16
第16図 トレンチ配置図	

## 発掘調査概要

船倉貝塚発掘調査概要	17
第17図 調査地位置図	写真6 貝塚上面
第18図 調査区位置図	写真7 1号人骨
第19図 出土遺物	写真8 2号人骨
	写真9 3号人骨
(仮称)連島台古墳文化財調査概要	20
第20図 調査地位置図	写真10 調査終了後
第21図 出土遺物	写真11 古墳全景
第22図 出土遺物	写真12 石室内遺物出土状況
第23図 出土遺物	写真13 古墳全景
	写真14 石室内部
	写真15 石室内部
	写真16 古墳全景

## 1991年度事業の概要

当市においては、市道の整備をはじめとする公共事業や民間の宅地造成等年々増加する開発事業に伴い、発掘調査を必要とする事業も増加の途をたどっている。これを反映して、1991年度は埋蔵文化財調査においても規模の大きな事業が相次いだ一年であった。なかでも、道路建設に伴い新たに発見され良好な状態を残していた船倉貝塚の調査や、宅地造成に伴い実施した連島台団地内の調査は、当市の歴史を位置づける上でも画期的な調査であった。

1991年度の調査は全体で、発掘調査2件、確認調査7件、立会調査10件を実施した。これらの詳細については次項に一覧を掲げ、主な調査の詳細は別項をもうけて収録した。

なお、埋蔵文化財に関する啓発事業として、発掘調査の現地説明会を船倉貝塚と連島台団地内の茂浦古墳群の2カ所で実施し、多数の参加者を得た。1991年11月には当市役所ホールにおいて「くらしきの文化財展」を開催し多くの市民に好評を得た。また、1992年3月には『倉敷市文化財だより第8号』を発行し、1991年度の文化財に係る事業全般について広く市民に広報活動をおこなった。



写真1 船倉貝塚1号・2号人骨

## 調査一覧表

No	遺跡名	調査地	調査原因	区別	調査期間	遺物・遺構の有無
1	鹿戸高層台団地内遺跡	鹿戸町鹿戸1337外	宅地造成	確認	91.6.10~14	中世土器他
2	陶神社北窓跡群	玉島陶地内	道路拡幅	立会	6.12	遺物・遺構無し
3	沙美東海岸遺跡	玉島黒崎地内	道路補修	立会	6.15	遺物・遺構無し
4	原ヶ市遺跡	玉島富地内	道路補修	立会	6.18	遺物・遺構無し
5	王子ヶ岳浜遺跡	兎島磨琴1422-9	保養施設建設	確認	6.21~28	旧石器他
6	福林湖遺跡	兎島稗田町2662-3外	道路新設	確認	7.2~3	遺物・遺構無し
7	船倉貝塚	船倉町1470-3外	道路新設	発掘	7.8~11.30	縄文土器・人骨他
8	上東遺跡・岩倉遺跡	上東144-日畠1-2	水道管埋設	立会	10.22	遺物・遺構無し
9	日畠橋遺跡	日畠字狐堂飛地1050-1	店舗工場建設	確認	10.21~22	弥生土器他
10	浜貝塚	玉島八島地内	交通安全施設設置	立会	10.27	遺物・遺構無し
11	連島台団地内遺跡	連島町連島地内	宅地造成	発掘	11.1~92.4.7	後期古墳3基他
12	中帯江貝塚群C	中帯江2674	ガス管埋設	立会	11.7	遺物・遺構無し
13	羽島貝塚	羽島地内	下水管埋設	立会	11.12	遺物・遺構無し
14	上東遺跡	上東字才の元571-1外	道路改良	立会	92.2.29~3.12	弥生土器他
15	上東遺跡	上東382-6外	道路改良	立会	3.18~19	弥生土器片
16	上東遺跡	上東一字木本675外	宅地造成	確認	3.18~19	弥生土器他
17	岩倉遺跡・才奈遺跡	日畠186外	排水管埋設	立会	3.19	遺物・遺構無し
18	酒津-水江遺跡	水江471-2番地先	遺跡範囲確認	確認	3.23~31	遺物・遺構無し
19	天王山荒神古墳	曾原字天王山975-2	土砂採集	確認	3.31	遺物・遺構無し



第1図 調査位置図 (S=1/100,000)

## 上東遺跡立会調査報告（上東8号線）

遺跡名 上東遺跡

調査地 倉敷市上東字才ノ元 571-1外（第1図14）

調査期間 1992年2月29日・3月12日

今回の調査は市道上東8号線道路改良工事に伴う立会調査である。

調査の契機となった同工事については、埋蔵文化財に関する事前協議がなされないまま着工され、平成4年2月29日に現地に立ち入った時点では道路側溝部分の工事が進行中であった。この事態について、工事施行主体に対し厳重なる注意を行い、岡山県教育委員会文化課の指導のもとで今後の対応について担当課と協議を行った結果、残りの工事については立会調査による対応を行い、工事完了後改めて全施行区域を対象として確認調査を実施することとなった。



第2図 調査位置図 (S=1/5,000)



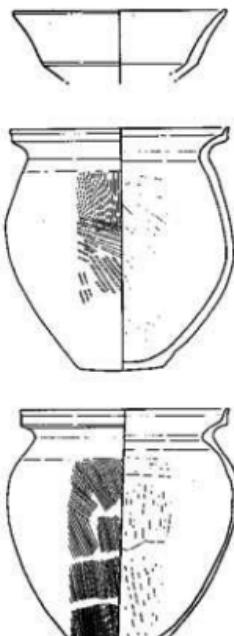
第3図 遺構配置図

調査地は、昭和46年から同47年にかけて岡山県教育委員会が実施した「山陽新幹線建設に伴う調査」における才の元調査区の南約50mに位置する。同調査では弥生時代後期前半の井戸、土壙、弥生時代～古墳時代の溝、中世の土壙などが確認されている。また、昭和50年から同51年にかけて岡山県教育委員会が実施した「都市計画道路（富本・三田線）に伴う調査」では才の元調査区の微高地端部がとらえられた。上記した2回の調査結果から、今回の調査区は、現在の上東集落とほぼ重なると想定される微高地の縁辺部にあたると考えられる。

平成4年3月12日に道路擁壁工事の立会調査を行った。掘り方（幅1.5m、深さ60cm）の観察では、工事区域のほぼ中央で農道と交差するあたりから西は比較的安定した土層堆積を現しているが、それより東にいくに従って砂質の強い土層が目立つようになる。おそらくこの付近で西から東に向かって微高地が傾斜しているのであろう。

確認した遺構のうち明瞭なものは土壙2基である。このうち土壙1については半掘して調査を行った。土壙1の上面は水田耕作による削平を受けており、地表下35cmで検出された。検出面での直径は1.0m、深さ90cmで、弥生時代後期の遺物が出土した。

（小野）



第4図 出土遺物 (S=1/4)

## 上東遺跡立会調査報告（上東50号線）

遺跡名 上東遺跡

調査地 倉敷市上東382-6外（第1図15）

調査期間 1992年3月18日～19日

今回の調査は、市道上東50号線道路改良工事に伴う立会調査である。

調査地は上東集落の南東端に位置している。近隣における最近の調査については、ここより南約80mの地点で昭和62年と63年に倉敷市教育委員会により「市道上東41号線道路建設工事に伴う確認調査」が実施されている。その調査結果によると、安定した土層堆積が形成されるのは中世以降とみられ、弥生時代の段階では微高地周辺の低湿地のような状況であったと考えられる。したがって今回の調査は、現在の上東集落の地域に想定される微高地の縁辺部にあたると思われる。



第5図 調査地位置図 (S = 1/5,000)



第6図 遺構配置図

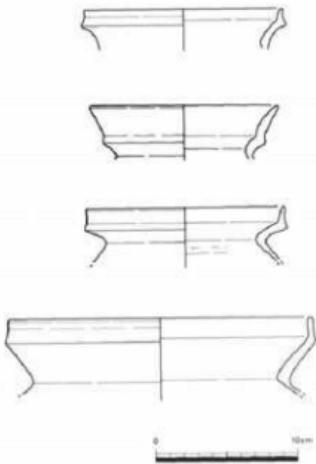
立会調査は道路擁壁工事の際に行い、弥生時代後期の遺物包含層と土壌1基を確認した。

遺物包含層は掘り方東壁の観察によると、上面は耕作等により搅乱を受けており、工事区间北端から南に向かって次第に厚さを減じながら約4mにわたって延びている。弥生時代後期の遺物を含むこの茶褐色土層は、あるいは遺構の中の堆積層の可能性もあるが、北端部は暗渠によって破壊され、調査面積の制約のため平面的な広がりも明瞭にし得なかったので明らかではない。土壌は地表下約25cmの高さで検出された。上面は耕作により搅乱を受けており、検出面での直径130cm、深さ76cmである。出土遺物としては、弥生時代後期の壺・甕・高杯などが少量ある。

(小野)



写真2 調査地北半



第7図 出土遺物 (S=1/4)



写真3 土層断面



写真4 土壠1

# 藤戸高陽台団地文化財調査報告

遺跡名 大辻山遺跡群F・藤戸東貝塚群F

調査地 藤戸町藤戸1337外（第1図1）

調査期間 1991年6月10日～14日

当該調査は、団地造成予定地内に所在する2ヶ所の中世遺跡について、その範囲と性格の把握を目的として実施した。

## 〔大辻山遺跡群F〕

遺跡は大辻山南東山麓の谷部に位置する中世土器散布地で、調査は8ヶ所のトレンチを設定

して行った。トレンチ1～3・7・8の層位は基本的に耕作土、自然堆積土、基盤層からなっている。トレンチ4～6では、厚さ20cmの旧耕作土の下はすぐに基盤層になっている。

## 〔藤戸東貝塚群F〕

遺跡は藤戸ハイツの東側、北に延びる尾根上に位置する。東側を採土によって削られており、採土の崖面上にトレンチ9～11の3ヶ所を設定して調査を行った。各トレンチの層位は旧耕作土、自然堆積土、基盤層からなっている。

今回の調査では、両遺跡共トレンチ内から土師質土器片・瓦片等、中世以後の遺物が少量出土したもの、明確な遺物包含層、遺構等は検出されなかった。この付近の山は段々畑の開墾によって地形がかなり改変されており、遺跡もこれによって削平されている可能性が高い。

（藤原）



第8図 トレンチ配置図 (S=1/5,000)

# 王子ヶ岳浜遺跡確認調査報告

遺跡名 王子ヶ岳浜遺跡  
調査地 倉敷市児島唐琴1422-9 (第1図5)  
調査期間 1991年6月21日～28日

王子ヶ岳の南西山麓斜面、傾斜のわずかにゆるやかになる場所に位置し、旧石器時代のサヌカイトが散布する遺跡である。県の保養施設建設に先立ち、同遺跡の範囲と性格の把握を目的として確認調査を実施した。設定したトレンチ ( $2 \times 2$ m四方) は9ヶ所で、各トレンチの概要は次のとおりである。

## 〔トレンチ1～6〕

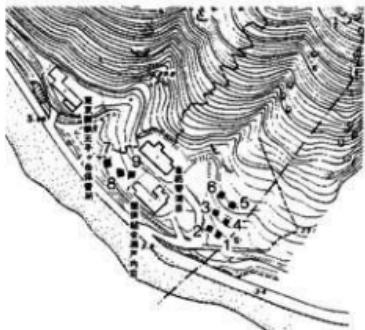
現在のクラボウ琴浦荘の東側に設定したトレンチである。花崗岩が所々に露出した地形なので表土の下はすぐに基盤層であろうと考えていたが、意外に堆積土が厚い(約1m)ことが判明した。旧石器時代の遺物が認められたのはトレンチ1・4・5からで、他のトレンチからは検出されていない。遺物はいずれも二次堆積層から出土している。遺跡地には楔を打ち込まれた石もあり、石切り場として利用されていたらしい。このため本来の位置を保つ遺物はないと考えられる。

トレンチ1からは加工痕のあるサヌカイト剥片他2点が検出された。1は加工痕のある剥片で、背面に左側から2枚の剥離が施されている。また2は表土中より出土した須恵器であり、かつて付近に存在した王子ヶ岳浜古墳に伴うものかもしれない。トレンチ4ではサヌカイトの石核・使用痕のある剥片等5点が出土した。4は石核である。自然面を打面として2～3cm大の剥片を数枚剥離している。3・5は縁部に使用による欠けの有る剥片である。トレンチ5からはサヌカイト剥片1点が出土した。

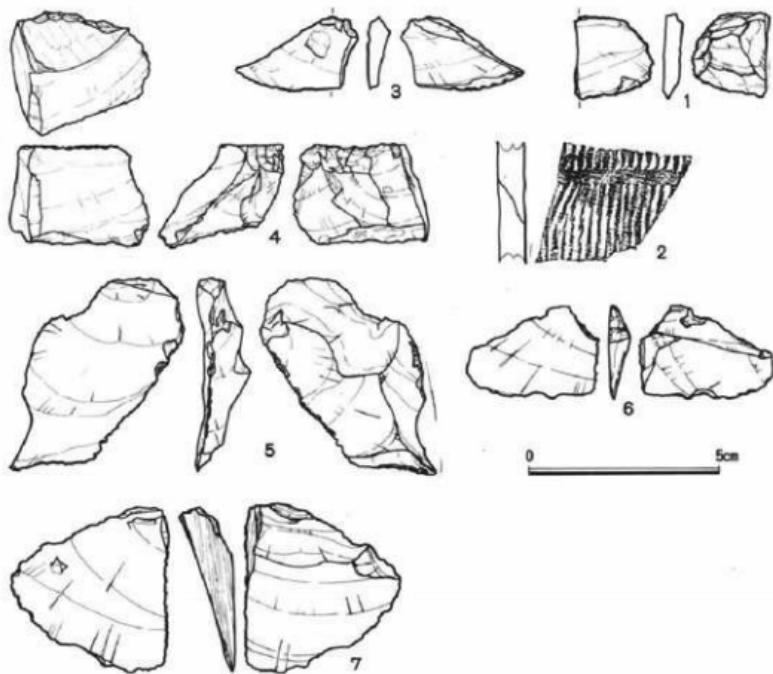
## 〔トレンチ7～9〕

クラボウ琴浦荘の西側に設定したトレンチである。深さ40～60cmで基盤層に達し、遺物・遺構等は検出されなかった。

調査の結果、二次堆積と考えられる層からではあるが、トレンチ1・4・5から遺物が検出された。しかしトレンチ2・3・6～9からは



第9図 トレンチ配置図 (S=1/5,000)



第10図 出土遺物 ( $S = 2/3$ )

遺物は検出されず、表面観察からもそれらしいものは見つからなかった。これらのことから遺跡範囲はトレンチ 2・3・6 以西には広がらないものと考えられる。

また、倉敷市文化財分布図記載の遺跡範囲の北東斜面を踏査した結果、サヌカイト剝片十数点（6・7）が表採され、遺跡範囲が北東斜面に向かって拡大することが判明した。（藤原）



写真5  
遺跡遠景  
写真中央の建物  
の右手が調査地

## 福林湖遺跡確認調査報告

遺跡名 福林湖遺跡  
調査地 倉敷市児島稗田町2662-3外（第1図6）  
調査期間 1991年7月2日～3日

福林湖は、東側の福南山と西側の正面山にはさまれた南北550mの細長い湖で、遺跡はこの湖の周囲をとりかこむように拡がっているが、東側については福南山の西裾部分を若干含んでいる。

平成3年5月、遺跡範囲の南端にあたる部分に市道福林溝一茶屋線の建設が計画されたため

事前に遺跡確認調査を行った。

調査の結果、トレント1・2・5では表上直下に角礫を含む黄灰色の土層が10～20cm程度みられ、その下は粘質の地山となっていた。また、トレント3・4では、前述した黄灰色土と地山との間に角礫を多く含む黄灰白色の土層が20～30cm認められた。これらの土層には遺物は全く含まれておらず、また遺構も検出されなかった。

今回の調査では、遺跡の存在を示す遺物・遺構はいずれのトレントからも検出されておらず、またこのあたり一帯が地形的に自然な状態を保っていると思われることから、遺跡の範囲は当該地までは及んでいないと考えられる。（鍵谷）



第11図 トレント配置図 (S=1/5,000)

## 日畠橋遺跡確認調査報告

遺跡名 日畠橋遺跡

調査地 倉敷市日畠字狐堂飛地1059-1 (第1図9)

調査期間 1991年10月21日～22日

農業用機械の店舗工場建設に先立ち、遺跡の範囲・性格を明らかにするために確認調査を行った。

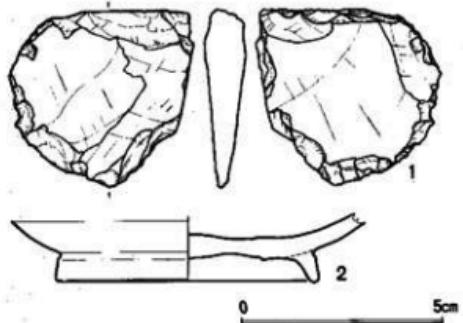
調査地は足守川の東岸、県道吉備津・松島線に沿った水田である。

調査は6ヶ所のトレンチ ( $2 \times 2$ m四方) を設定して行った。

トレンチ1～3・6では、青灰色粘質土層が確認されたが、トレンチ4・5では確認されなかった。

このことから、ある時期にトレンチ4・5付近が微高地であり、その北東側は河川あるいは低湿地であった状況がうかがえる。

検出された遺構は、トレンチ5における溝1本のみである。溝の正確な時期は不明だが、埋土より中・近世の土器細片が出土しており、それほど古いものではないと考えられる。遺物としては、弥生時代から中・近世にかけての土器片・石器が各トレンチから出土している。1は



第13図 出土遺物 (S=2/3)



第12図 トレンチ配置図 (S=1/5,000)

トレンチ5の耕作土から出土したサヌカイト製石器である。約半分が欠損しているが弥生時代の石包丁と考えられる。2はトレンチ4の青灰色粘質土層から出土した早島焼の底部である。これらの遺物の層位はばらばらで時期を追って出土してはいない。

(藤原)

## 上東遺跡確認調査報告

遺跡名 上東遺跡  
調査地 倉敷市上東字一本木675外（第1図16）  
調査期間 1992年3月18日～19日

本調査は、有限会社岡山住宅による宅地造成に伴い実施した遺跡確認調査である。調査地は上東の集落の北東端にあたり、山陽新幹線から約300mほど離れたところに位置する。現状は水田である。水田面の標高は1.25mで、西方の集落にある地点よりわずかに低くなっている。

確認調査は、約1400m<sup>2</sup>の造成予定地内に2×2mのトレンチを3ヶ所掘削して行った。このうち西端のトレンチ1では、現水田面下約30cmで灰褐色粘土層がみられた。この層からはわずかに弥生土器と思われる土器細片が出土するものの、遺構は認められなかった。以下の層は暗灰褐色粘土層、淡黒灰色粘土層、青灰色泥砂層と続くが、これらの層のいずれからも遺物

遺構は検出されていない。また、東方に設定したトレンチ2・3についてもトレンチ1とはほぼ同様の層位がみられ、各層位がわずかに東に向かって傾斜しているのが確認された。

今回の調査では、いずれのトレンチからも遺構は検出されておらず、遺物についても流入と思われるわずかな土器片がみられたのみであった。また、各層も粘土質が強く、下層にいくにしたがいシルト状を呈していく。これらのことにより、当該地周辺は集落跡の存在する微高地の縁辺にあたり、湿地状の凹地であったことがうかがえる。

(福本)



第14図 トレンチ配置図 (S=1/5,000)

## 酒津—水江遺跡確認調査報告

遺跡名 酒津—水江遺跡

調査地 倉敷市水江471-2番地先外（第1図18）

調査期間 1992年3月23日～31日

酒津—水江遺跡の範囲確認調査は、高梁川河川敷に存在する遺跡の一部が流水等により年々損傷を受けているため、昭和53年度より継続的に調査を実施しているものである。平成3年度は、第14次の調査を行った。

調査対象地は、酒津八幡山山塊の南麓、旧西高梁川が八幡山の西を通り柳井原から平野に出る部分のやや北東よりの位置にあたる。この周辺は、平成元・2年度の調査により弥生時代中期から古墳・奈良・中世にいたる遺跡が、山裾に広がる微高地状に形成されていたことが確認されており、今回の調査は遺跡の北端を確認するとともに大正年間の堤防改修工事に削平されたと思われる丘陵の縁辺における遺跡の有無を確認すること目的に行われた。

調査は、対象区域内に $2 \times 2$ mのトレンチを任意に8ヶ所掘開し、土層の確認を中心に行つた。このうちトレンチ1～6においては、高梁川改修時に削平された丘陵の基盤と思われる黄褐色の岩盤が検出され、トレンチ7・8では湿地状のシルト・細砂が検出された。これらのこ

とにより、丘陵は現在の川岸近くまで延びており、河川改修時にかなり大規模に削平されたことが判明した。また、いずれのトレンチからも遺物遺構が検出されていないことから、古水江渡し付近から広がっていた遺跡は削平された丘陵の南側まで、丘陵北辺には湿地が広がっていたものと思われる。

（福本）



第15図 トレンチ配置図 ( $S = 1/5,000$ )

## 天王山荒神古墳確認調査報告

遺跡名 天王山荒神古墳

調査地 倉敷市曾原字天王山975-2 (第1図19)

調査期間 1992年3月31日

本調査は、有限会社オピニオンセンターによる土砂採掘工事に伴い実施した遺跡確認調査である。調査地は、種松山丘陵の南東に派生する小尾根の先端に位置する。周辺は以前から土砂採掘工事が行われ、丘陵西側には市道が、さらに東側には瀬戸中央自動車道が通り、地形は大きく変形を受けている。かろうじて残された尾根の先端部には、偏平な花崗岩を組み合わせて作られた小祠がまつられており、祠の周辺は土盛り状にわずかな高まりがみられ、一見古墳の墳丘のようにも見受けられる。

調査は、祠のある高まりの東西に2本のトレンチを設定して行った。土層の観察の結果、祠のある高まりは約1mにわたってしまりのない造成土により盛られたもので、造成土の下面には旧表土と思われる黄灰色の硬質土がみられた。また、祠の花崗岩も造成土上に据えられたものであった。なお、遺物については全く検出されなかった。

これらのことにより、当初古墳の墳丘とみられた高まりは、祠の設置に伴い比較的新しい時期に盛土されたものであると考えられた。したがって、祠が古墳に用いられた石材を利用したものであるという見方はあるにしても、少なくとも現在みられる頂部の高まりは古墳とは認められないものであった。

(福本)



第16図 トレンチ配置図 ( $S=1/5,000$ )

## 船倉貝塚発掘調査概要

遺跡名 船倉貝塚

調査地 倉敷市船倉町1470-3外（第1図7）

調査期間 1991年7月8日～11月30日

今回の調査は都市計画道路（羽島・四十瀬線）建設に伴う発掘調査である。

船倉貝塚は、これまで周知の遺跡として把握されておらず、今回の工事中に新たに発見された遺跡である。平成3年7月6日に、重機による掘削で貝層が露出しているのを確認し、今後の対応について協議がなされたが、工事計画の変更等による現状保存が不可能と判断され、やむを得ず緊急発掘調査を行うこととなった。

調査地は向山の西裾に位置する。周辺はかなりの急傾斜地であるが、貝塚は比較的傾斜のゆるやかな入江状の地形に形成されている。付近は最近まで住宅地や果樹園として利用されており、地形の変形が著しい。

調査区の基本的な層序は、旧耕作土、擾乱層、混土貝層（貝層）、混貝土層とづき、以下わずかに遺物を含む褐色土層、基盤層となっている。検出された貝層の分布は2地点に分かれ



第17図 調査位置図 ( $S = 1/5,000$ )



### 第18図 調査区位置図



写真6 貝殻上面

ているが、住宅造成等による削平を免れた部分だけが残っているとすると、本来貝層は連続したものであったかもしれない。

調査区Ⅰでは南北約10m、東西約2mの範囲で貝層が検出された。ハマグリ、カキ、ハイガイを主体とする貝層には縄文時代前期から後期の遺物が含まれている。貝層の調査については分層発掘が困難であるため、調査区を50cm方眼に区分けし厚さ10cmごとに貝層を採取して定量分析に備えた。採集した貝層サンプルは調査区Ⅱと合わせると整理用コンテナ約1000箱分におよぶ。貝層の出土遺物については、現地調査での知見をもとに述べると、縄文土器、サヌカイト製の石鎌、石匙、スクレイバーやイノシシ、シカの骨、魚骨などがみられた。遺構については、土壙墓3基、土壙1基などが確認された。

1号土壙墓は平面形が不整円形で、検出面での大きさ 130cm × 110cm、深さ85cmである。埋葬人骨は後頭部が土壙の壁に密着し、仰向けの姿勢で両脚を少し開いて斜め上方に伸ばした状態で検出された。大腿骨以下の部分は残っていない。人骨の頭部に接して管玉状の骨角製品が2点出土した。また、埋葬人骨と土壙の底との間には厚さ20cm以上の土層がみられる。この層には大小の礫、炭化物が含まれ、イノシシの顎骨が混入している。出土した土器は里木I式に比定できる。

2号土壤墓は平面形が不整方形で、検出面での大きさは 100cm×90cmである。埋葬人骨は体を横向きにして、強く折り曲げた状態で



写真7 1号人骨

検出された。頭上には2個の角礫がのっている。また埋葬人骨とは別に、火を受けて変色した骨が混入している。出土した土器は里木I式に比定できる。

3号土塚墓は平面形が長楕円形で、検出面での大きさは118cm×76cmである。埋葬人骨は仰向けの姿勢で両脚をそろえて曲げた状態で検出された。出土遺物は認められない。

なお、検出された人骨の鑑定は兵庫医科大学解剖学教室の欠田早苗氏に依頼しており、詳細については報告を待ちたい。

土塚1は平面形が円形で、検出面での直径115cm、深さ45cmである。土塚内には角礫が多数含まれ、わずかに炭が混入する。少量の縄文土器が出土したが時期は不明である。

調査区IIの貝層は先述したように調査区Iで検出された貝層と一連のものである可能性が考えられる。貝層上面は後世の擾乱を受け、調査区のすぐ南には墓地を画する石垣が存在したため、実際に貝層を検出して調査を行ったのは東西約9m、南北約2mの範囲である。調査方法については調査区Iと同様に、貝層をブロックごとに採取した。現地調査での知見では出土遺物には縄文土器、サスカイト製石鏃、スクレイバー、石槍や黒曜石、獸骨などがある。遺構として明確なものは認められていないが、炭粒の拡散を伴う円礫群が検出された。

(小野)



写真8 2号人骨



写真9 3号人骨



第19図 出土遺物 (S=1/3)

## (仮称)連島台団地文化財調査概要

遺跡名 茂浦貝塚群A・C、茂浦1~3号墳

調査地 倉敷市連島町連島地内（第1図11）

調査期間 1991年11月1日~1992年4月7日

今回の調査は、(仮称)連島台団地の造成に伴い、工事予定地内に存在する遺跡について実施したものである。なお、平成2年度に行った確認調査により、茂浦貝塚群B・D・E及び大江貝塚群Bについては段々畠の造成によりすでに削平消滅していることが確認された。また、大江貝塚群Cについてはその一部で純貝層を検出したが、測量により工事の範囲外になることが判明した。したがって、これらの中世貝塚については今回の調査対象外とした。



第20図 調査地位置図 (S=1/5,000)

### 〔茂浦貝塚群A・C〕

当該地は平成2年度に行った確認調査により、中世の遺構と貝塚の存在が想定された地点である。

調査の結果、中世と思われるピット18基を検出したが、いずれも段々畑の造成により削平を受けているうえ、果樹栽培に伴う長方形状の掘り込みが調査区の全面にわたってあけられており、残存状況

は非常に悪い。これらのピットは調査区の東端と西端に集中して検出されたが<sup>6</sup>、建物としてまとまりをもつ柱穴は確認されなかった。また、前回の確認調査で、下段の斜面からその一部が確認された中世貝塚については全く検出されておらず、既に削平され消滅した可能性が強い。

なお、今回の調査区の上方に位置し、貝塚以外の中世遺跡が存在する可能性がある丘陵頂部から尾根上について、5ヶ所のトレンチを設定して確認調査を行なった。その結果、いずれのトレンチも旧耕作土の下は即ち山になってしまっており、遺構及び遺物包含層は認められなかった。

### 〔茂浦1号墳〕

標高約76.5mの谷頭に位置する円墳で、南南東に開口する無袖の横穴式石室を有する。石室の規模は、現状で長さ4.7m・幅0.9m・高さ1.4mを測る。東側壁はかなり内傾し、西側壁の前半部は2次的に移動させられたらしく、その内外に掘り込みの痕跡が残っている。墳丘は段々畑の造成により前半部と上半部を既に失っていたが、背後には幅約1m・深さ約0.3mの浅い周溝が残っており、その規模は直径7m程度になると思われる。

石室は、5×3m程度の隅丸長方形状の掘り込みの中に構築されており、その底面がそのまま石室の床面となっている。石室奥寄りには棺台と思われる石材が4個置かれており、石室床



写真10 調査終了後



写真11 古墳全景



写真12 石室内遺物出土状況

面からの出土遺物は概して少なもの全てこの周辺から検出されている。主なものとしては、金環1・鉛ガラス玉1・須恵器杯身2高杯1などの他、鉄釘片が多数出土している。これらの出土遺物から、築造時期は7世紀中頃と思われる。

〔茂浦2号墳〕

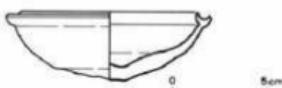
標高約64.5mの丘陵東斜面に位置する円墳で、南東に開口する無袖の横穴式石室を有する。古墳は、段々畠の造成により墳丘の東半及び上半を削平されており、築造時の状況をあまり留めていなかった。石室の規模は、現状で長さ7.2m・幅2.0m・高さ2.0mを測るが、東側壁先端には2次的に移動した石材があり、石室全長は9m程度

に復原できる。古墳の背後には最大幅

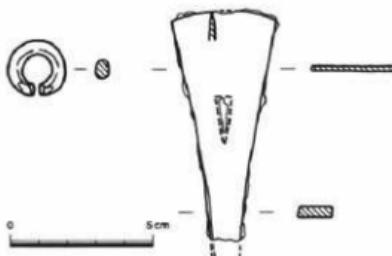
2m・深さ0.3mの浅い周溝が巡っており、墳丘規模は現状で約11mを測る。

石室の奥半分は、石室掘り方底面に若干の整地を行い床面としているのに対し、前半分については石室掘り方が延びておらず、旧地形の緩斜面に石材を置き、その内側に土を盛ることにより奥半分の床面と同レベルにしている。

石室床面から出土した遺物としては、金環7・滑石製白玉及び土製丸玉の首飾りをはじめ鉄鎌・鉄釘等があるが、その量は概して少ない。器種判定ができる須恵器は完形の平瓶が1個体



第21図 出土遺物 (S=1/3)



第22図 出土遺物 (S=1/2)



写真13 古墳全景



写真14 石室内部

のみで、しかも石室前端部の擾乱壙から出土しているため、古墳の築造時期については明らかではない。

#### 〔茂浦3号墳〕

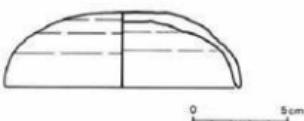
2号墳の南約30mの丘陵東斜面に位置する円墳で、南東に開口する無袖の横穴式石室を有する。1・2号墳と同様、段々畠の造成により墳丘の多くを失っており、石室も東側及び前半分の崩落が激しい。石室の規模は、現状で長さ9.5m・幅2.0m・高さ2.1mを測る。墳丘の背後には幅1.5m・深さ0.4m程度の周溝が廻っており、墳丘の復原直径は約14.6mとなる。

石室の構築方法は2号墳とほぼ同じで、奥半分は石室掘り方の底面に側壁の基礎を置き、前半分は旧地形にそのまま側壁の石材を置いている。したがって、石室前端部では最大で約40cmの盛土を行い床面を作っているが、なお奥壁とは30cm程度の比高差があり、築造当時の床面はかなり斜めになっていたと思われる。

石室内は、奥壁付近及び前半部を中心に盜掘を受けた痕跡があり、床面からの出土遺物は石室の中央からやや奥よりにかけての一部分に限られた。その主なものとしては、金環1・ガラス小玉の他、須恵器杯蓋1・鉄釘等があるが、その量は少なく全体としては点在という状況であった。また、床面からやや遊離した状態で、ほぼ完全に復原できる須恵器提瓶が1個体出土している。

これらの出土遺物が示す年代は、6世紀後半から7世紀初頭であり古墳の築造時期もほぼこの頃と考えてよいと思われる。

(健谷)



第23図 出土遺物 (S=1/3)



写真15 石室内部



写真16 古墳全景

倉敷市埋蔵文化財調査年報1  
— 1991年度 —

---

平成4年10月1日 印刷発行

編集・発行 倉敷市教育委員会  
岡山県倉敷市西中新出640番地

印 刷 (有)カジウラ印刷所

---

